

まるやま
丸山C 遺跡

所在地 豊田市田折町丸山地内
(北緯 35 度 1 分 39 秒
東経 137 度 19 分 30 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成
事業

調査期間 平成 26 年 9 月～平成 26 年 10 月

調査面積 1,250 m²

担当者 成瀬友弘・石井香代子・尾崎弘子

調査経過 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県企業庁より
委託を受けて実施した。



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万「東大沼」)

立地と環境 本遺跡は、東西に延びた尾根頂部のやや平坦な場所に当たり、一連の丸山遺跡の中では最も高所に位置する。標高は海拔 495m 前後である。調査地の中央は表土の流出により、表土直下で東西に延びる礫層が確認できる状態であった。また、調査地内や周辺には人頭大から 1m 近くの花崗岩の礫が散在していた。

調査地東の丸山 B 遺跡では、尾根の頂部近くで弥生時代の竪穴建物、溝などを検出している。また、調査地南東の尾根近くに位置する丸山 D 遺跡では、古代の遺構・遺物が多く検出、出土した。

調査の概要 調査地は、表土と包含層を合わせて 20cm 前後の厚さであり、それらを外した地山上で遺構検出を行った。その結果、土坑とコ字状を呈する溝等を多数検出した。

コ字状の溝は 3 条検出している (089SD、090SD、130SD)。斜面の傾斜方向と溝の向きが排水等の用途と合わず、溝に囲まれた内側で地山の礫が露出しているものもある。このことから、竪穴建物に伴って掘られたものではないとみられる。遺物も出土しておらず、時期は不明である。

土坑は、大小合わせて 170 基ほど検出している。遺物を伴うものはほとんどなく、規則性が認められるものもなかった。そのため、ほとんどの土坑について、時期や用途は不明である。また、表土に近いこともあり、木根等の攪乱も多く含まれているものとみられる。

性格や所属時期の不明な土坑が多数を占める一方、071SK と 072SK からは弥生時代初頭の条痕文土器の破片がまとまって出土した。検出時は 2 基の土坑と考えられたが、遺物の出土状況からすると 1 基の不整形な土坑の可能性がある。数点の土器片は、地面に刺さったように出土した。また、口縁部や底部近くの破片もあり、もともと 1 個体に近い土器が土坑に据えられていた可能性がある。周辺からも条痕文土器の破片が出土しており、表土の流出等で周囲に散らばったものとみられる。

これらの遺構からは、遺物がほとんど出土しなかったのに対し、調査地中央を横断する礫層の特に東では多くの遺物が出土した。大半は 072SK と同じ条痕文土器である。礫層上で集中して出土した地点が 1 カ所あった。その他の土器片は、礫の間や上で出土していた。

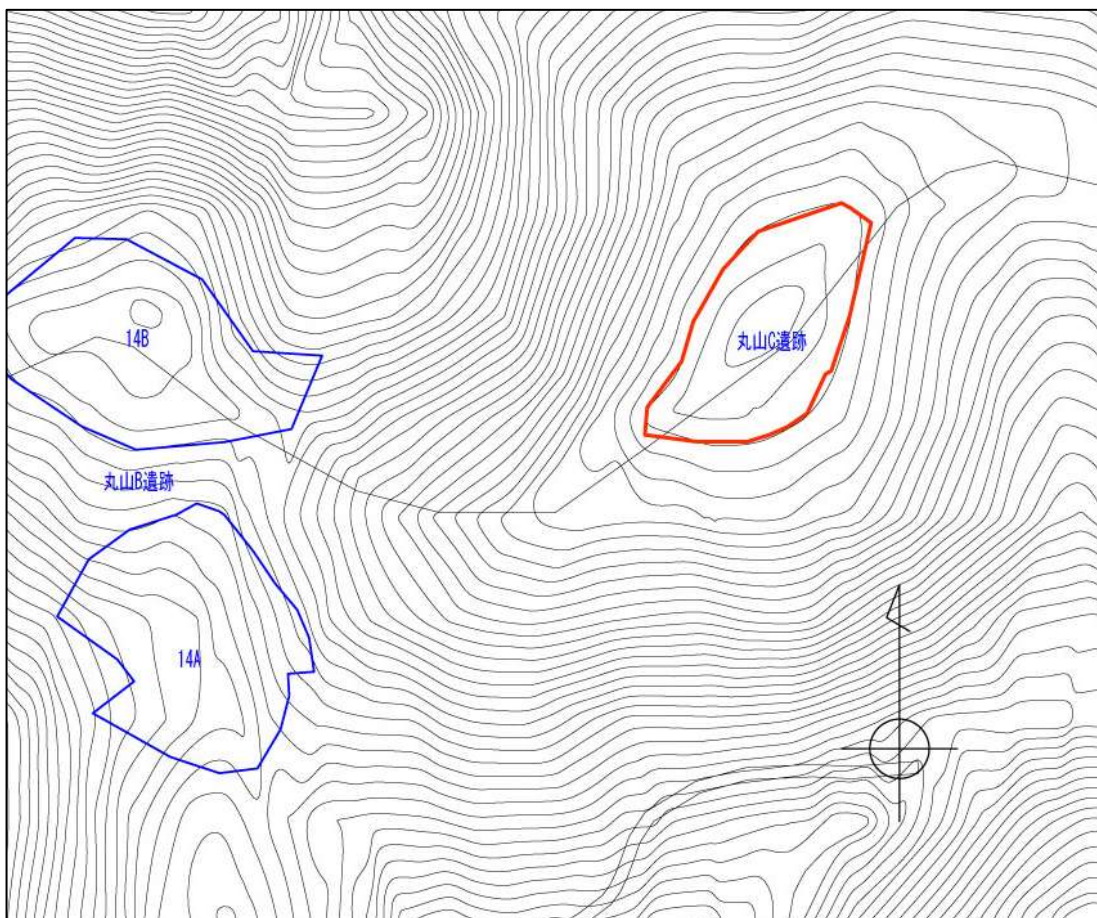
集中していた場所に関しては、礫層上ということもあり遺構検出はできなかった。072SK のようにもともと遺構があり、周辺の土が流出して周囲に土器片が流れた可能性も考えられる。

なお、この礫層上の遺物には縄文土器も含まれていたが、縄文時代の遺構は確認できなかった。

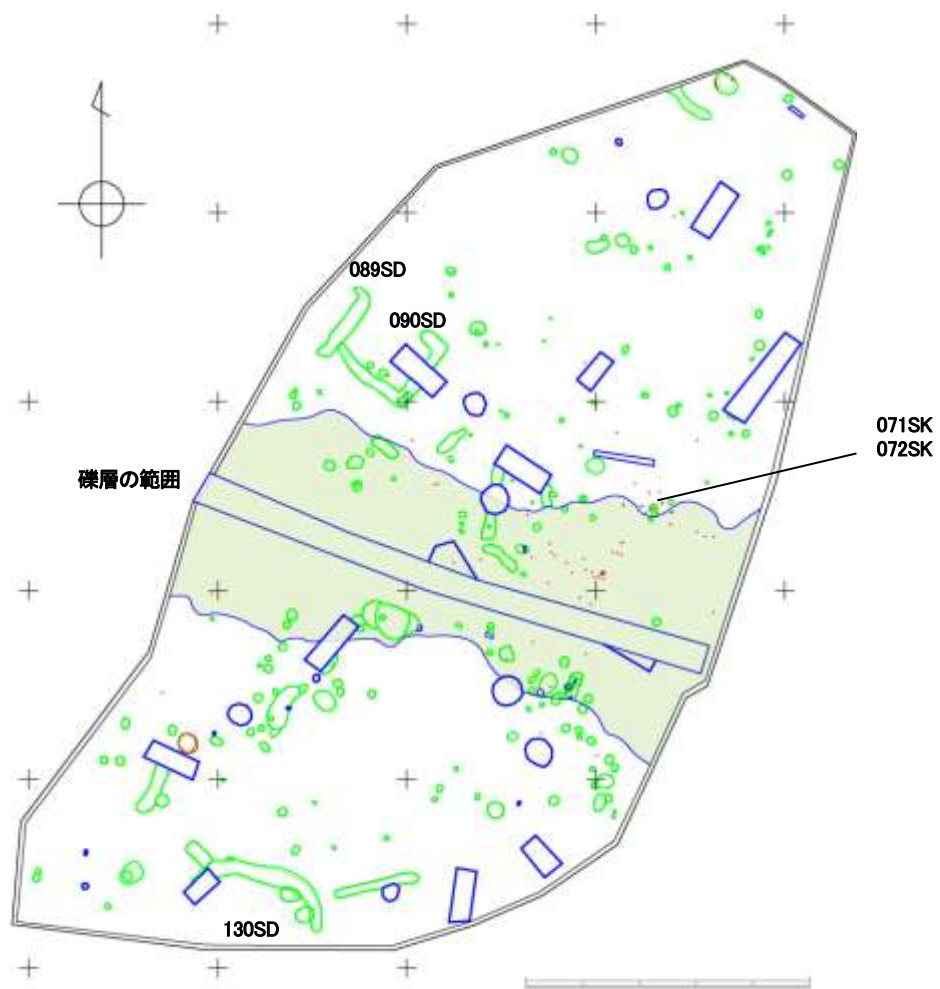
近世以降の調査では、炭焼窯に利用された土坑を 10 基検出した。いずれも 2m 前後の平面円形の土坑である。炭焼窯に伴う遺物は出土していない。

ま と め 丸山 C 遺跡は、尾根の頂部に当たり周辺の遺跡では最高所に位置していた。今回の調査では、特にその中でも最も高く、すぐに礫層に達して居住や遺構の掘削には不向きと思われる場所から多くの遺物が出土した一方、その周辺では遺物が出土しないという不可解な状況がみられた。

本遺跡のような、尾根頂部での調査例そのものが下山地区では少ない。また、同じように尾根上に位置する丸山 B 遺跡とも異なった様相がみられる。本遺跡がどのような性格の遺跡なのか、他の尾根でも同じ状況が展開していたのかなど、多くの疑問を投げ掛ける調査結果となった。 (石井香代子)



丸山C遺跡 調査区図 (1:1,500)



丸山 C 遺跡 遺構配置図 (1:400)

赤ドットは遺物出土地点



090SD 完掘状況



遺物出土状況



礫層上での遺物出土状況



071SK 遺物出土状況



出土遺物（縄文土器）



出土遺物（条痕文土器）



調査地全景（上が西）